よ　世の中，学校だけじゃないよ

通知簿，通知票，あゆみ，あしあと，などといろいろな名前のものがありますが，子どもたちの学習状況を保護者にお知らせするものはたいていの学校にあります。そして，ここに記載された内容によって喜怒哀楽さまざまな状況が生まれます。それは昔も今も同じです。

小学校教員としての生活を始めた年，授業もさることながら，学習成績を評価し評定することは非常に緊張する仕事でした。国語にしても，1か月の学習についての評価をする月末テスト，単元ごとの単元テスト，小テスト，学校行事として隔週に行われていた漢字テスト，ノートの点検，作文・感想文の記録，読みのテストなど，いろいろな種類の評価データを集計し，それをもとに5段階で評定する仕事がありました。それぞれの内容などによって重みをつけて計算しました。電卓なんてまだなかった時代，その主役はそろばんでした。欠席した日のテストは多分このくらいはとれるだろうという見込み点をつけて集計し，小さな紙切れに書き成績順に並べて5，4，3，2，1に評定しました。厳密な相対評価ではありませんでしたが，あらかじめ定められていた比率は，学年や学級によって，あるいは担任の個人差によって生じる偏りを小さくすることに役立っていました。

あるとき，こんなことをしてみました。大きく引き伸ばしたクラスの写真を前に，1人1人の子ども思い浮かべ，平素の学習状況を思い起こし，この子は3，この子は4，というようにつけてみたのです。

その後，いつもと同じように複雑な計算をして，「4だろうか，3だろうか」と思い悩みながら評定しました。33人のクラスで両方の成績を並べてみました。食い違いはたった1人でした。あとは見事に一致していたのです。こうなると，食い違いの「4」と「3」が問題です。

どちらが真の評定に近いのでしょう。細かい計算を繰り返した末の評定，子どもたちが授業の折々に現した表情をはじめとする記憶が中心になっている評定，そのどちらが真の値に近いのでしょうか。

朝，登校したときから子どもとの交流が始まり，多いときには 1 日に 6 時間もつきあい，いっしょに給食を食べ，いっしょに掃除し，放課後にも残して指導し，といった毎日が繰り返される小学校では，特別なテストをしなくとも評価できるように思いました。とはいうものの，「じゃあそんな方法にしておこう」という具合にはいきませんでした。やはり，詳細な記録をとり複雑な計算をしていました。

それから 30 年あまり過ぎたある日，学年末の成績処理を終え，ほっと一息ついていた若い先生にこの話をしました。彼からは，

「そうですね。私もだいたいのところはできそうに思います。しかし，保護者に『これはどうして 2 なのですか』と質問されたら困ります。説得できそうにないのです」

という答えが返ってきました。

たしかにそうです。私が，一応の自信を持ちながら，そんな評価方法をとれなかったのもそうでした。

あれから数十年，評価に対する保護者の受け取りようも大きく変化しました。昔は，評価する先生を信頼し，評価された結果を信じていただきました。

「先生がつけられたんだから」

と，私のような若造の仕事でさえ信じていただきました。それが学習の成果を正しく評価されたものと受け止めていただけました。しかし，その一方に

「学校は学校，世の中，それがすべてではないよ。お父さんなんか，この腕 1 本で生きてきたんだ」

という考え方がありました。そして，そんな考え方が広く受け入れられていました。

今は，その逆のように思います。

「ほんとうに，これでいいの。ちゃんと評価されているの。間違っていないの。あの先生を信じていいのかしら」

と評価の信憑性が疑われ，

「学校の成績は大切よ。それであなたの一生が決まるのよ。お父さんのような学校出てたら駄目なのよ」

そんな声が聞こえてきます。

そうした風潮の中で，子どもの姿を全体的に見るやり方は「おおよその見方」「大雑把な見方」として敬遠され，これが何点，これで何点，合計して何点だと計算し，「A君は 268.78，Bさんは 268.63，やはりA君のほうが上だ」というような見方が大手を振って歩いているような気がします。

もちろん，評価は測定の 1 種ですから，可能な限り詳しく正確に行うべきものです。いろいろな実験のときに最小目盛りの 10 分の 1 まで読み取るというやり方を続けてきた理科の教師としては当然のことです。

でも，「木を見て森を見ない」というようなことになっていないでしょうか。そして，「評価する・評定する」という作業に力を取られ，その子どもの全体像を把握し，問題点を見つけ出し，よりよい成長を実現していくという肝心の仕事がなおざりになってはならないと思うのです。